

変わるものと変わらぬもの

会長 近藤 英治

『紅白』はオワコンだと揶揄される声もあるなか、大晦日はすき焼き鍋を囲みながら画面の向こうの舞台を楽しんだ。多様なジャンルのアーティストが並んでおり、試行錯誤を繰り返しながら時代の変化に対応して、番組全体が徐々に進化してきたことがよく分かる。新鋭の豊かな才能に驚かされる一方、60～70代のベテランによる往年と変わらぬパフォーマンスにも感銘を受けた。華やかな舞台の裏には、出演者個人の積み重ねた努力と、『紅白』を運営する組織の大変な苦勞があるのであろう。



勿論、努力が必ず報われるとは限らない。日産やパナソニックの大規模なりストラ報道を目にすると、決して社員の努力不足が原因でないことは想像に難くない。これは、社会の変化を読み、そのニーズに即して対応する柔軟性の必要性を示唆しているように思える。大学や医療現場を取り巻く環境も刻々と変化している。私たちも外向き志向で未来を読み、異見を柔軟に取り入れていかなければ、生き残りは難しいだろう。

周囲の状況が変化しているにもかかわらず、先人のやり方に倣うだけで事足りりとする姿勢では、個人も組織も停滞を免れない。「前例を守っていれば責任は問われない」、「他人が決めてくれれば、自ら責任を取らずに済む」といった風土が残る限り、個人・組織の成長は望めない。失敗や責任追及を恐れ、新たな提案を否定することは容易だが、その言動が、私たちが大切にしている組織の未来を閉ざす一歩となるかもしれない。だからこそ、皆さんには開拓者の精神を忘れないでいただきたい。そして地道な努力を積み重ねて機会を待ち、いったん論理的な裏付けをもって決断したならば、悲観的に計画を練ったうえで果敢に踏み出す姿勢を期待したい。

また、『紅白』では76歳の日本ロック界のレジェンドが、「紅白歌合戦、出させてくれてありがとうございます！」と頭を下げ、颯爽とステージを後にする姿も格好良かった。尊敬される人は謙虚で誰に対しても丁寧な言葉で接することが多いように思う。真に自信のある人は、相手よりも優位に立とうとしたり、肩書きや立場で相手を圧する必要がないのであろう。近年、教授会でも毎月のようにパワハラに関する注意喚起が行われている。かつては武勇伝のように語られた飲酒運転が、いまや重大な反社会的行為と見なされるように、ハラスメントに対する社会の目も厳しさを増している。

医療や研究の現場には、毎年新しい仲間が加わる。誰でも最初は分からないことばかりであり、彼ら後進を支え育てるのも私たちの役目である。威張ることで権威が増すことはない。目上にも下に対しても、相手の人格を尊重し、謙虚さと感謝の気持ちを忘れない—そうした安心して成長できる環境を、いつの時代でもどこの職場でも大切に培っていきたい。

熊本の産婦人科医療体制の整備は、まだ道半ばであるものの、一步一步前進している。若い先生には恐れず挑戦する勇気を、円熟期や老境に入った先生には若々しい探究心と行動力を、ぜひ持ち続けていただきたい。刻々と変化する困難な状況の中こそ「可能性」があると信じ、今年も変化を恐れず、互いに支え合いながら歩んでいきましょう。

2026年 睦月